

未来に
つながる
学びの情景

一人ひとりの“にしき”を

今号の表紙 兵庫県 篠山市立西紀小学校

「にっこりわらって、しっ
かりはっぴょう きらき
らえがお」——子どもや
教員が作った「にしき」
の標語。この木いっば
いに飾るのが目標だ。

毎年春に児童全員で行う田植え。1年生から経験を積んできた6年生は、後片づけも率先して行う。なぜ苗の間隔を空けるのか、なぜ苗を水没させてはいけないのか、生産者の工夫や苦勞を経験から感じ取っていく。

地域の産業である林業を体験したり、史跡巡りをしたりと、6年間で地域を体系的に学べるようカリキュラムを組み、どの学年も地域に出て学ぶ。地域の人たちとの触れ合いから地域への思いも感じ取る。

同じ中学校区の小学校3校合同で行う5年生の自然学校。学校混合の活動班で5日間活動する。いかだ下りではみんなで声をかけ合い、協力して、前へ前へと突き進んだ。

篠山市の将来を支える人材の育成に向け、ふるさと教育に力を入れる兵庫県篠山市。市内でも自然豊かな地域に位置する篠山市立西紀小学校では、「勉強がわかる」「人の気持ちがわかる」という2つの「わかる」を軸に教育活動を展開する。特に力を入れているのが、地域や同じ中学校区の小学校3校が連携した体験学習だ。地域の人たちの協力を得ながら米やサツマイモを全学年の縦割り班で育てたり、市の事業でもある「スクールブリッジ」では3校合同で市内の公共施設見学や外国語活動などを行ったりする。

「自然を相手にしたり、他者と協力したりする活動の過程では、自分の思い通りにいかないこともあるでしょう。うれしい、楽しい体験だけではなく、苦しくて大変な体験を通して、他者の痛みや悲しみがわかる、心豊かな人間に育ってほしいと考えています」と、塚本一男校長は語る。

それらの教育活動での合言葉が、校名を取り入れた「にしきをかざる」だ。「にっこりほほえみ しんじるなかまときずなふかめる」など、その活動で大切にしてほしいことを、「にしき」を頭文字にした標語で伝える。「子どもたちもたくさん『にしき』を作って投稿してくれています。一人ひとりの輝きが見て取れるようです」と、塚本校長はほほ笑む。

生活科や「総合的な学習の時間」などで地域に出て、6年間をかけて自然や文化、産業などを体で学んでいく子どもたち。町探検で遺跡の貴重さを知った中学年の子どもが「今度作る新聞で紹介しよう」と町の歴史を深く調べたり、「今度の川探検では、こんな生き物が見つかるよ」と、高学年の子どもが下級生に生き物の探し方を教えたり。自分たちが住む地域の素晴らしさを伝えたい——子どもたちは少しずつこれからの「にしきをかざる」一員になっていく。